



「伝えたい言葉」「言葉だから表せること」

＝第5回日本語大賞・表彰式を開催＝

日本語の美しさや言葉のもたらす力を見つめ直すエッセーや作文に与えられる「日本語大賞」（日本語検定委員会主催）の第5回表彰式が、2月23日午後、文部科学大臣賞の受賞者4人らが出席して東京・千代田区の読売新聞東京本社国際会議室で行われました。

第5回のテーマは小学生の部・中学生の部が「伝えたい言葉」、高校生の部・一般の部は「言葉だから表せること」。米国、中国、ドイツなど海外15カ国からの206点を含めて、小学生の部1424点、中学生の部668点、高校生の部343点、一般の部128点と、これまでで最も多い計2563点の応募がありました。

第1次、第2次の審査を経て、審査委員10人による最終審査が行われ、小学生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞3点、佳作5点）、中学生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞3点、佳作5点）、高校生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞2点、佳作5点）、一般の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞2点、佳作5点）の4部門の各賞が決まりました。



この日の表彰式には▽小学生の部、千葉県富津市立富津小学校4年、森田悠生さん▽中学生の部、東京都・早稲田大学高等学院中学部1年、田中秀和さん▽高校生の部、米国シカゴ双葉会日本語学校補習校2年、岡田東子さん▽一般の部、群馬県・主婦、高山恵理子さん—の文部科学大臣賞受賞者4人が全員出席し、それぞれに賞状、楯、副賞が贈られました。森田さんの同賞受賞は2年連続です。

表彰式は、フリーアナウンサーで審査委員の梶原しげるさんの司会で進行了ました。主催者を代表して梶田叡一理事長（兵庫教育大学名誉教授、聖ウルスラ学院理事長）が「たくさんの方が寄せられ、改めて日本語やことばの大切さを感じた」とあいさつ。審査委員を代表して読売新聞東京本社専務取締役の大橋善光さんが、文部科学大臣賞受賞作品について講評。「日本語の持っている力と、いつ、どこで、誰が、どんな状況で言葉を発したかがマッチした時に、とてつもない力を発揮するのが日本語だと改めて感じた」と述べ、4人の作品がいずれも情景や心情の描写に優れており、日本語の魅力や奥深さを見事に引き出していることをたたえました。



このあと、梶田理事長から表彰状を受け取った受賞者が自らの作品を朗読しました。

一カ月の闘病から退院してきた母親が味覚を失ったことを知り、自分が味付け役を引き受けて一緒に料理を作るようになるなど家族の絆を深めた日々を優しさあふれる文章でつづった、森田さんの「ぼくがいるよ」▽自然の恵みや食事を作ってくれた人への感謝の気持ちを込めた「いただきます」「ごちそうさま」の意味を、海外で生活して初めて知り、日本の文化や言語の素晴らしさを次世代にも伝えていきたいという思いを作品に込めた、田中さんの「伝えたい感謝の気持ち」▽小学校高学年で渡米した作者が、米国人の友人と折り紙を通じて心を通わせていたが、気を遣いすぎて一時的に関係が悪化してしまい、辞書をひき英語で書いた3行の手紙をきっかけに会話が復活し仲直りするまでの様子が、細やかな心の描写とともにひしひしと伝わってくる、岡田さんの「言葉でしか表せない心」▽プールの受付係をしていた作者が偶然に耳にした少女の「パパ大好き」という素直なひとことから、言葉が持つ力に改めて気づき、自分の両親への淡い思いと後悔の念を振り返りつつ、思いを言葉で伝える大切さを噛み締め、これからの生き方への決意もにじませた、高山さんの「パパが好き」一の順で朗読。緊張した面持ちながらしっかりした口調で読み終えると、会場から大きな拍手が送られました。

梶原さんのインタビューに4人は、時折笑顔を見せながら受賞の喜びや作品に込めた思いなどを語っていました。

最後に時事通信社社長の西澤豊理事が閉会の辞を述べ、表彰式は約1時間で終了、ご家族や審査委員らが表彰された4人を囲んで記念撮影も行われました。

（文責：時事通信社 升谷 昇）

